

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第96号

令和1年10月8日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

四国・薩摩・菊池・大宰府と戦いに明け暮れた懐良親王

戦いの傷跡を今に伝える将軍梅や将軍藤

● 正行討死後、菊池に入る ●

懐良親王は、父・後醍醐天皇の命を受け、五條頼元等とともに九州制圧に向かう。

正行は、父の遺訓を護り、正統な吉野朝廷復権に向け黙々と和睦の道を探るも、北畠親房の主戦論に抗しきれず、1348年1月、四條畷の戦いに散って逝った。

一方、1339年、四国・忽那島に入った懐良親王は、苦難の末、1342年、薩摩・谷山城に入り、谷山で6年の歳月を費やし、正行が討死した1348年1月、ようやく菊池にたどり着き、九州征西府構築の第一歩を歩みだす。

正行と懐良親王が生き、活躍した時代はすれ違う！

● 身分差はあるものの、共に大きな苦勞 ●

◆大義名分論と身分差

懐良親王と正行には中世絶対的な身分差があった。

懐良親王には、いわば九州における君主としての苦勞～上位身分ゆえの苦勞があり、正行には、吉野朝に良臣として仕える苦勞～下位身分ゆえの苦勞があった。

◆戦いの量と質に大きな違い

懐良親王にとって、九州で頼りとする有力な武将は菊池一族のみで、幕府方の少武・大友・畠山・島津らの包圍網を突破しなければならないという軍事的課題がありながら、自前の親衛軍を持たず、付き従った五條頼元以下の公家には土地も財力も武力もなかった。

ようやく菊池に入って菊池経営の安定に14年の歳月がかかっている。その後、大宰府征西府を置くが、結果、懐良親王は戦いに明け暮れた37年を送る。この間、九死に一生を得た大原野の戦いも。

一方、正行は、吉野朝廷を護りながら力を蓄え、実質的な戦いは、正平2年8月隅田攻めから正平3年1月四條畷合戦までの、たった半年間でしかない。

◆組織作りの差

懐良親王は、自前の軍隊を持たず、菊池一族や忽那水軍、山の民らの協力を得て、一から軍隊づくり・組織化を図らなければならなかった。

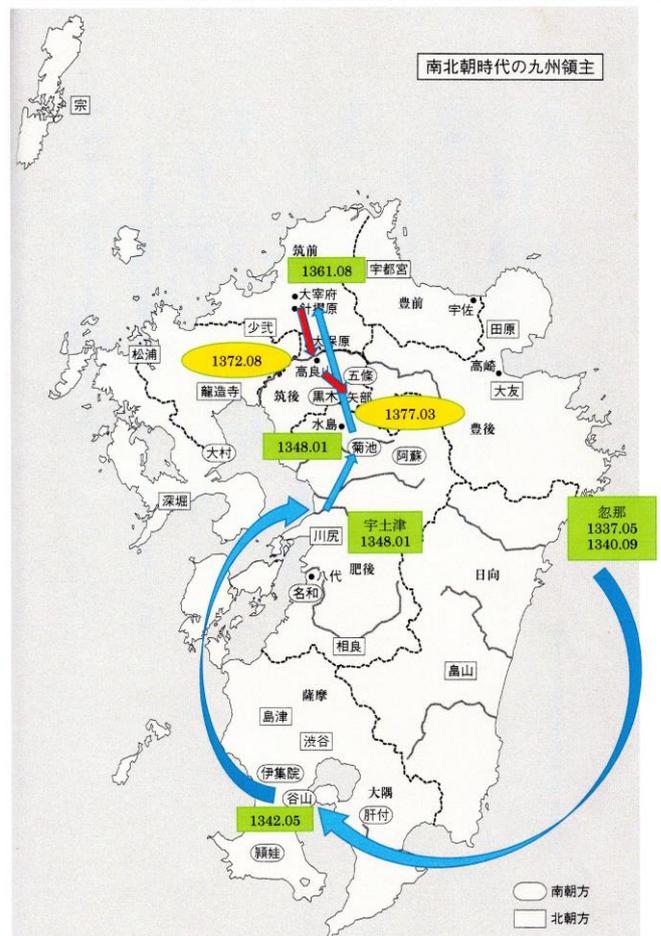
また、五條頼元等は、新天地で山の開墾から生活の基盤づくりを始めなければならず、平地や山裾は、在地の領主らの勢力範囲であり、山奥深く入り込んだ開墾、集落づくりには何年もの年月を必要とした。

正行には、正成の遺した精鋭部隊があり、水運・陸運・辰砂等の地場産業による一定の財政基盤もあった。

懐良親王は水軍とともに倭寇貿易で財を成し、菊池では「正平御免革」を製品化するなど、土地ではなく、銭で武士を養うという新しいスタイルも作った。

以下2つの資料は、例会の学習で使ったもの。

●懐良親王の九州制圧（図は、「九州の南朝」新泉社より）／四條畷楠正行の会 2019.09.10 資料



■懐良親王・五條一族・菊池一族の関係年表

2019.09.10(2016.07.12作成を追加・改訂 限谷)

和暦	西暦	征西府(懐良親王・良成親王)	五條一族	菊池一族	橘一族	
元弘元年	1331			3月11日 武時、博多に到着 武時・武重の嫡子・清の別れ、武重を肥後に帰す 「ふるさとに今宵ばかりの命とも、知らずや人の我をまつらん」 3月12日 武時、鎮西探題に出仕、着到の遅参をなじられ、侍所と口論 3月13日 武時、九州探題を襲撃し、討死 その子頼隆を戦死	2~3月、千早城攻防戦	
2年	1332			武重、肥後の守 武時所 その弟、武義は掃部頭に、武茂は対馬守に、年次は不明だが武澄も肥前守に任じられる	正成、建武の中興、功勞一番 は菊池武時と評価	
3年	1333			5月 武重、上洛 12月 武重、新田義貞に従い、箱根竹之下の戦いで足利軍と戦う 菊池千本権の登場 ~ 小刀を青竹の先に付けた槍隊による踏みすまをつつて進撃 2月 弟の武敏、大宰府攻撃 少武武敏を討ち取る 3月2日 多々良の戦いで、武敏敗れ、専氏の太宰府入城を許す 専氏、東上開始 5月18日 武重、福山城で防戦、京に逃げる 5月25日 湊川の戦いで、弟の武吉討死 5月27日、武重、帝の比叡山遷幸に随行 隘路義助の下、東坂本に布陣 10月10日、帝、専氏の甘言に京都へ戻る 武重、遷幸に従い囚禁される 11月17日 専氏、建武式目発布し、幕府開設 帝、花山院に幽閉される 12月 帝吉野に逃れる前に、武重、囚禁を脱し、河内を経て、菊池に帰る(2月?)	清原頼元、後醍醐帝より、懐良親王の守役を命じられ、五條姓を賜る 五條頼元、懐良親王に随い四国・九州に!	5月 桜井の別れ
建武元年	1334	懐良親王6歳  1 菊池高校正門わきに植え立つ將軍木、熊本県指定天然記念物。		2月、武重、寺尾野城で挙兵 九州、武家方に脅威を走る ~ この後、武重、恵良惟清とともに戦う 惟清は惟時と対立 この年の末、武重、病死	5月25日 湊川で討ち死に	
2年	1335	懐良親王、忽那島に入る	頼元51歳、懐良親王を奉じて忽那島に入る。嫡子、良氏懐良親王の教育係を務める	武士の後見役 武敏→武茂 菊池一族 ~ 惣領権不安定時代		
4年	1337	5月1日 藤原谷山に入る。6月7日、島津勢を新福寺城で破る「金鳥の御旗」	良氏、懐良親王の教育係勤める!	武士、引退(21歳) 3月、深川城を確保 ~ 恵良惟澄の支援	正行 8月 隅田川の戦い	
5年	1338	11月24日 谷山城出奔	頼元、良氏、良遠父子、懐良に随行して谷山家出奔	武光、肥後守 正月2日、武光、宇土に懐良親王を迎える	8月 隅田川の戦い	
6年	1339	正月2日、宇土津(宇土港)到着。 1月14日、菊池に入る 菊池武光によって隈部城内で松嶺館を催す。懐良、標の水を捕える。今も「將軍木」と呼ばれ、菊池高校正門のそばに立つ。 9月14日、革研究の為、八代妙見宮を訪れる。以後、「正平御免章」「八代御免章」と呼ばれ、後世に名声を残す。	良氏、八女郷を根拠地と決め、開墾・開墾に陣頭指揮!	武光の戦い~すべて攻撃に在り	正月5日、四條堀の戦い	
7年	1340	7月、溝口城の攻防、少武勢を破る	良氏、八女郷経営に専念	~ 九州、宮方・探題方・直冬の三分時代		
8年	1341	2月、針摺原の合戦で、一色父子を破る。征西府直隸部隊の根拠地づくりとして、八女郷・矢部の里の開墾に着手	良氏、懐良が重傷を負った後、影武者として頼元、深手を負う。 10月30日、良氏、35歳の生涯を閉じる。	武光の戦い~すべて攻撃に在り		
9年	1342	8月、大原合戦の激闘		7月15日 武光、親王とともに筑後川を渡り、少武軍と対陣		
10年	1343	重傷を負った懐良、八女郷星野の妙見城で治療に専念	良氏、皇子親治を、弟良遠に預け、征西府の安寧を託す。	8月6日、7日 大原の合戦 武光、少武軍を破る		
11年	1344		頼元、78歳の生涯を閉じる	~ 筑後川の戦い九州第一の巨戦 大將軍・十人将・五力騎軍 そして太刀洗川の名		
12年	1345		頼治(良氏実子・良遠養子)	8月12日 武光、高良山に退く		
13年	1346		懐治、八女郷東部を征西府永遠の拠点にと決意。矢部里要塞化に取り組む。	11月16日 武光、戦傷のため死去 武光の子、武政、阿蘇惟武に支援求める		
14年	1347		五條家、後醍醐帝の命を受け、懐良・良成を支え続け、八女郷を終の據家と定め、今に至る。	8月3日、武政の子、賀々丸(武朝)、福童原の戦いで今川了俊に敗れる		
15年	1348	懐良、大原合戦場を訪れ、犠牲者を弔い、紅梅を植える。今なお「將軍梅」として久留米市宮の陣神社に残る。 次いで、福童原の大中臣神社を訪れ、藤を植える。600年を得た今日、「將軍藤」と呼ばれ、福岡県の天然記念物に指定されている。 8月7日 博多に入る		8月12日 武政、高良山に退く		
16年	1349	5月、宮方、九州を統一		11月16日 武光、戦傷のため死去 武光の子、武政、阿蘇惟武に支援求める		
17年	1350	後村上天皇第6皇子、良成親王、九州に入る		8月3日、武政の子、賀々丸(武朝)、福童原の戦いで今川了俊に敗れる		
18年	1351	3月 明の使節来る		6月23日 武朝追われ、良成親王の染土城陥落		
19年	1352	7月12日、高良山征西府へ退却。8月12日 今川了俊の攻撃を受け、落城		今川了俊との壮絶な戦い続く		
20年	1353	高良山総攻撃をかけた今川了俊を武正、敗走させる。この時武正が飲んだ奥の院の水は、その後「勝ち水」とも呼ばれ、今も参詣者に飲ませられる。		今川了俊、川尻・宇土を陥落させる		
21年	1354	懐良、良成親王に征西將軍の職を譲り、引退、筑後矢部に入る		8月、八代城陥落 良成親王・名和顯興伏 武朝、行方くらまず		
22年	1355	9月、託磨原の戦い		武朝、今川了俊と交渉し、代々、肥後守護職に就く		
23年	1356	懐良、3月27日 55歳の生涯閉じる				
24年	1357					
25年	1358					
26年	1359					
建徳元年	1370					
2年	1371					
文中元年	1372					
2年	1373					
3年	1374					
天授元年	1375					
2年	1376					
3年	1377					
4年	1378					
5年	1379					
6年	1380					
弘和元年	1381					
2年	1382					
3年	1383					
元中元年	1384					
2年	1385					
3年	1386					
4年	1387					
5年	1388					
6年	1389					
7年	1390					
8年	1391	山原の戦い。急速、稲の収穫を決め、一致団結して勝利。 この年12月15日、良成、矢部里入りを決意。12月29日、矢部里に入る。				
9年	1392	良成、大仙御所に入る。10月 南北両朝合一				
明德4年	1393	5月、良成、矢部里での暮らしに決意。今川了俊、良成を連歌の会に招待。 9月、良成、素戔鳴神社に参拝し、藤を植樹。今も「黒木の大神」として人々を楽しませている。				
応永元年	1394	10月26日、良成、35年の生涯を閉じる。	良成死去を受け、頼治は、五條一族は矢部里に永遠に残り、良成の遺言通り、民のために働く、と方針を示す。			
5						
1403			頼治、五條熊野神社を再建			